

## 今年度の取り組み

### 音楽的感受性を高め、よりよい表現を追究するための支援

川原真矢

#### 1 音楽的感受性\*1を高め、よりよい表現を追究するための支援とは

子どもたちが歌唱や器楽、音楽づくりの活動に取り組む際、互いの表現を比較したり、表現と音楽を形づくっている要素\*2とを関連付けたりしながら思考することを大切にしたい。なぜなら、互いの表現を比較したり、表現と音楽を形づくっている要素とを関連付けたりして思考することで、音楽的感受性が高まり、よりよい表現を追究していくことができるからである。しかし、音楽活動の経験が少ない子どもたちにとって、表現と音楽を形づくっている要素とを関連付けて思考することは難しい。そこで、子どもたちが表現したり聴いたりする活動を繰り返す中で、音楽を形づくっている要素に結びつく発言や表現を見取り、問い返したり価値付けたりしていくことを大切にしたい。そうすることで、音楽を形づくっている要素の働きを感じ取って表現を工夫し、自分の思いや意図をもって表現することができると考えている。

そこで、本年度は、以下のような視点で支援を行う。

- ・ 表現と音楽を形づくっている要素とを関連付けて思考する場の設定
- ・ 見取りを生かした問い返しや価値付け
- ・ 音楽を形づくっている要素やそれらの働きが生み出すよさにつながる振り返り

#### 2 実践事例 曲に合わせて歌おう「うたでさんぽ」 (第1学年)

##### (1) 授業の構想

###### ① 求める「学びを実感する子どもの姿」

- ◇ どうすれば楽曲に合った歌い方ができるかという問いをもち、繰り返し歌ったり聴いたりしている
- ◇ 範唱を聴いたり楽曲を歌ったりする中で、音楽を形づくっている要素の働きを感じ取り、思いをもって楽曲に合った歌い方をしている
- ◇ 楽曲や互いの表現から感じ取ったことや考えたことを伝え合い、試したり聴き合ったりする中で、より楽曲に合った歌い方を考えている
- ◇ 音楽を形づくっている要素の働きを感じ取りながら、楽曲に合った歌い方を考えることで、思いをもって表現する楽しさを感じている

\*1 音楽的感受性とは、音楽の様々な特性に対する感受性を意味しており、音楽を感覚的に受容して得られるリズム感、旋律感、和声感、強弱感、速度感、音色感などである

\*2 「音楽を形づくっている要素」とは、「音楽を特徴付けている要素」(音色、リズム、速度、旋律など)及び「音楽の仕組み」(反復、問いや答えなど)に加え、歌詞、歌い方や楽器の演奏の仕方、演奏形態など、音楽というものを形づくっている要素を含むものである

## ② 学びを実感する子どもの姿を導くために

- ア** 音楽を形づくっている要素に結び付く発言や表現が見られた際、互いの表現を試したり聴き合ったりする場を設ける。そうすることで、音楽を形づくっている要素の働きを感じ取ることができるようにする。
- イ** 音楽を形づくっている要素に結び付く表現をしている子どもを見取った際、意図的に取り上げ、なぜそのように表現したのか理由を問う。そうすることで、子どもの感じたことや考えたことが明らかになり、音楽を形づくっている要素の働きを感じ取ることができるようにする。
- ウ** 授業の振り返りをする際は、「楽しかったこと」とその理由を問う。そうすることで、音楽を形づくっている要素の働きが、音楽表現の楽しさにつながることに気付くことができるようにする。

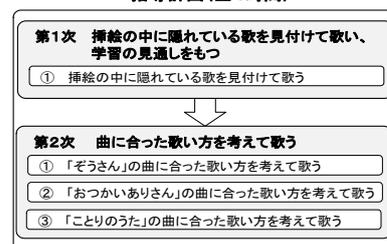
## ③ 目標

- 音楽を形づくっている要素の働きを感じ取りながら、楽曲に合った歌い方を工夫し、思いをもって歌うことができるようにする。
- 楽曲に合った歌い方を工夫する活動をとおして、音楽表現の楽しさを感じ取ることができるようにする。

## (2) 子どもの学びの実際

※波線は思考力が発揮された子どもの意識、下線は前述の支援との対応を表す指導計画(全4時間)

本題材は、歌詞の表す様子を思い浮かべたり、楽曲の気分を感じ取ったりして表現を工夫し、思いをもって歌う学習である。ここでは、「ちょうちょう」「ぞうさん」「おつかいありさん」「ことりのうた」の4曲を取り上げ、動物の特徴や歌詞を手がかりに身体表現を伴い、楽曲に合った歌い方を工夫していった。



### ① 「ちょうちょう」の曲に合った歌い方を考えよう【第1次の学び】

第1次では、単元の始めに教科書の挿絵を提示し、「絵の中に、何の曲が隠れているか分かるかな」と問うた。子どもたちは、「ぞうさん」「こぶたぬきつねこ」「ちゅうりっぷ」など、これまでに歌った歌や知っている歌を答えた。一通りの曲名が挙がったところで、子どもたちのよく知っている「ちょうちょう」を歌うよう促すと、手を蝶の羽のように動かしたり、拍に合わせて両足を曲げたりする姿が見られた。その中で、A児は蝶のイメージとは違う動きをしながら歌っていた。そこで、A児の動きを再現すると、「曲に合っていない」との発言が多かった。しかし、H児は、「えっ、合うよ」とつぶやいたため、何が合っていると思うのか問い返すと、「リズムが合っている」と音楽を形づくっている要素に結び付く発言をした。そこで、全員で「A児の動きがリズムに合っているか」という点に着目して、A児の動きを見るよう促した。【支援ア】すると、「リズムに合っている」と感じている子どももいたが、曲のイメージとA児の動きに違和感を覚えている子どもが多数見られた。どうすれば「ちょうちょう」の曲に合うか話し合うよう促すと、「ちょうちょうになりきって歌うとよい」という発言があった。そこで、ちょうちょうになりきったH児の動きと、先程のA児の動きとを見比べるよう促した。【支援ア】すると、K児が「H君は、動きは似てるけど」

リズムに合っていないくて、A君は、リズムにはちょっと合っているけど、動きが全然違う」と発言した。しかし、「リズム」が何を示しているのか理解できない子どももいた。そこで全体に、もう一度リズムに合わせた動きをしながら歌うよう促す【支援ア】と、拍の流れに合わせて手を動かす子どもの姿が多く見られた。この動きを再現して紹介すると、子どもたちは「リズム」を理解することができた。子どもたちの発言に出てくる「リズムに合った動き」とは、拍の流れに合った動きを意味している。この後、子どもたちはゆ



拍の流れに合った動きを試す子ども

## ② 「ぞうさん」の曲に合った歌い方を考えよう【第2次第1時の学び】

第2次第1時で、「ぞうさん」の曲を紹介すると、子どもたちは、鼻に手を当てて、「どうすれば象らしくなるか」ということを考えながら歌っている様子であった。そこで、拍の流れを感じて手を動かしている子どもを意図的に取り上げ、なぜそのような動きをしながら歌ったのか問うた。【支援イ】すると、「この動きが曲に合っていると思うから」と答えた。そこで、どこが曲と合っていると思うか全体に問うと、「手をゆっくり動かしていたところ」「リズムに合って、手の動きがゆっくりしていたところ」という発言が多く見られた。このような話し合いの中で、子どもたちは、この曲にはゆったりとした動きが合っていることに気付いていったのである。さらに、膝を曲げながら歌っている子どもを見取り、全体に紹介した。【支援ア】すると、多くの子どもが、「膝を曲げているのが、曲に合っている」と発言した。この発言から、1拍目で膝を曲げて歌うと、曲に合った歌い方になることを感じ取っていることがうかがえた。

その後、子どもたちが、手を動かしたり膝を曲げたりしながら、拍の流れを感じて歌えるようになったところで、手の動きを付けずに歌うよう指示した。すると、子どもたちは手の動きではなく、曲に合った歌い方をいろいろと試していた。多くの子どもが歩き回りながら歌う中、その場で足踏みをして歌っているT児を見取った。そこで、T児になぜ足踏みをして歌ったのか問うた。【支援イ】すると、「手を動かさなくてもこの（足踏みの）動きが頭に浮かんだから」と答えた。このときのT児の動きは、1拍目の強拍で足を踏み、弱拍では自然と身体を揺らしていたのである。この動きを見た子どもたちは、象の大きな足音を思い浮かべ、「ぞうさん」の曲に合った歌い方になっていると感じている様子であった。また、足踏みをすることで自然とアクセントが付いた歌い方になり、3拍子の拍の流れに合った歌い方になっていったのである。



足踏みをするT児

## ③ 「おつかいありさん」の曲に合った歌い方を考えよう【第2次第2時の学び】

前時までの学習で、子どもたちは、拍の流れに合わせて歌うと、その曲に合った歌い方になるということを、感覚的に捉えてきていた。しかし、本時の「おつかいありさん」では、「『こっつんこ』のところで、頭と頭をこっつんこする」というように、歌詞に合った動きに意識が向いていた子どもが多かった。そこで、「言葉に合わせて動くだけで、曲に合った歌い方になるのかな」と、子どもたちに問うた。すると、「それだけではない。小さな声で

歌う。でも、あまり小さな声ではなくて、普通の大きさ」と、声の大きさについての意見が出た。そこで、「近くの人とどのくらいの声の大きさを歌うとよいか、聴き合ってごらん」と促す【支援ア】と、隣の人に聞こえるくらいの声で歌う子どもが多かった。そこで、なぜ、小さい声で歌うとよいと思ったのか理由を問う【支援イ】と、「ありは、すごく体が小さいから、声も小さい」と、蟻の小ささを声の大きさを表そうとしていることが分かった。さらに、話し合う中で、「速くしたら、こつつんこするようになるのではないかな」という意見が出たので、テンポを上げて歌うよう指示した。すると、「楽しい」「速くて面白かった」という感想が多く聞こえた。そこで、今の速さが曲に合っていたか、近くの人と話し合うよう促した。【支援ア】話し合いの中で、テンポが速すぎるとリズムに合った動きができないことに気付いたグループがあった。以下に、そのやり取りの一部を示す。

教師 今回の速さはどうだった？

R児 合っていなかった

教師 どうして、合っていなかったの？

F児 リズムに合っていないから

R児 速すぎて、リズムに合わせるのが難しかったから

F児の、「リズムに合っていない」という意見を全体で取り上げ、おつかいありさんのリズムを考えていく中で、歌詞に合わせてジャンプしている子どもを見取った。そこで、「ちよん」という歌詞のところでジャンプをしようと思った理由を問うた。【支援イ】すると、子どもは、「ちよんちよんのときに飛ぶと、リズムに合っている」と発言した。このことから、子どもはリズムを感覚的に捉えていることが分かった。そこで、「ぞうさん」のときのように歩きながら歌うよう指示をした。すると、拍に合わせて歩く子どもたちの中で、スキップをしながら歌う子どもの姿が見られた。その子どもの動きを見取り全体に紹介した後、歩くのとスキップでは、どちらが曲に合っているか問うた。子どもたちは、「たぶんスキップの方が合う」とつぶやいたが、確信がもてない様子であった。そこで、全員にスキップをしながら歌うよう促し、【支援ア】どちらが曲に合うかたずねた。すると、ほとんどの子どもが、スキップの方が、曲に合っていると納得した様子であった。授業の終わりに、「どうやって歌ったら、楽しくなったかな」と、感想を聞いた。【支援ウ】N児は、「スキップをすると楽しかった」と、付点のリズムに合わせて動くことの楽しさを感じていた。このように、歌詞やリズムに合わせて動きながら、曲に合った歌い方を考えていったのである。

### 3 実践を振り返って

子どもたちの表現や発言は、感覚的なものが多い。一見、楽曲に合った動きになっていないと思う表現も、音楽を形づくっている要素を感じ取った動きになっているものがある。「ちょうちょう」の楽曲で、多くの子どもが「合っていない」と感じたA児の表現も、理由を問うたり別の表現と比較したりすることで、子どもたちは音楽を形づくっている要素の働きを感じ取ることができたのである。このことから、互いの表現を比較したり理由付けしたりすることは、楽曲に合った歌い方を考えるために有効であった。しかし、今回の実践では、楽曲にあった歌い方の工夫が身体の動きに偏ってしまい、子どもたちの意識が音楽表現に向かわなかった。今後は、音楽を形づくっている要素を音楽表現に生かしていけるような支援の在り方を研究していきたい。